原発事故から一年　～子供を育てるママたちの声から～

宗形初枝　平成九年派遣　県中地区

2012. 6. 30

東京電力福島原子力発電所の人災による事故が発生してから１年が過ぎた。みんな必死に生きてきた。10ヶ月間一度も外遊びをさせていないという母親も多かった。この夏一度も公園などに連れて行ってないので公園の前を通って滑り台やブランコをみても遊ぶものと思わないのか何の反応も示さない。こんな我が子を見て涙が止まらなかったという母の声がこの原発事故の悲惨さを物語っている。

あれから一年。今年の３月に入り私の勤める病院の看護師が涙ながらに次のように訴えてきた。「3月末で仕事を辞めたいと思う。１年間避難しようと思いながらも避難しないでがんばってきた。しかし１年が過ぎても放射能の問題は何の解決にもなっていない。この先子供が病気になったとき私は避難しなかったことを後悔するだろう。だから今仕事を辞め子供と一緒にいる時間を多くしたいと思う。父親と離れて暮らすことは考えられないので避難はしない。子供といる時間を多くしたいだけ」と言うのである。結果的に仕事を辞めることはなかったが、多くの母親たちが同じような思いであることは事実である。地震や津波は多くの今までの命を奪っていった。しかし原発事故はこれからのしかも小さい子供の命を脅かしているのである。

平成24年3月末の時点で郡山市から県外へ避難している数は7700人と伝えられている。しかし原発事故以降も、市内では多くの命が誕生し多くの子供が生活している。原発事故当時１歳だった子供は２歳になり、２歳が３歳になり子供は止まることなく成長し続けている。子供は歩き出すと外に行きたがる。外に行けば庭の石を拾い、土や草を触り、花を摘み、虫を見て驚き喜ぶ。しかしこの原発事故は子供の発達成長にとって大切な５感を養うべき自然との触れあいを奪ってしまった。石を拾えばだめ！草むらに入っていけばだめ！花や草に触ればだめ！と言わねばならない母親の関わりなどあるだろうか。何をやっても怒る母親を子供にはどう映るだろうか。お花を見たらきれいだね、触ってごらん。石を拾ってポケットに入れようが、砂を少しくらい口に入れようが、それを喜び見守り笑顔で接するべき母親がいつも鬼の形相でいなければならない。このような関わりが子供の成長にどう影響するのか心配である。

郡山市内には大きな遊び場も設置され毎日にぎわっている。母親たちにはそこで思いっきり遊ばせるよう話している。しかし今もこれからも必要なことは、子供たちの成長とともに日々変化する母親たちの心に寄り添いきめ細やかにサポートしていくことであると思う。それを今後も実行していくつもりである。